別紙様式３

平成21年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

脳血管障害者における人格構造の変化と心理的要因が日常生活活動に与える影響

学位の種類：　修士（作業療法学）
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　作業療法科学系
学修番号　08896607
氏　名：高山　大輔
（指導教員名：大嶋　伸雄教授）

注：1,000字程度（欧文の場合300ワード程度）で、本様式１枚（Ａ４版）に収めること

脳血管障害者が回復期リハビリテーション病棟において、より効果的にリハビリテーションを進めるために、対象者の身体機能や神経心理学的側面、生活動作能力だけでなく心理的なケアや個人のパーソナリティの評価を効率的に行うことができる手段を確立することは作業療法分野において非常に重要であると考えられる。

本研究は脳血管障害者に着目し、リハビリテーションを実施して行く上で重要な脳卒中後うつ（PSD）と人格構造面との関わりを明らかにしていくとともに、リハビリテーション過程においてこれらの要素がADL機能の回復とその予後にどのような影響をおよぼすのかを検討した。

調査は回復期リハビリテーション病棟に入院している脳血管障害者 13 名を対象に、Zung's Self-Rating Depression Scale(SDS)、一般的 Locus of Control 尺度（一般的 LOC 尺度）、Multidimensional Health Locus of Control 尺度(MHLC 尺度)を実施し、ADL 能力との関連性を検討した。

その結果、入院時は ADL 能力の低さがうつ状態を引き起こす一要因となる可能性が示唆されたが、退院時には ADL 能力に関わらず、うつ状態の悪化や残存がみられ、ADL 機能と心理的要因との乖離がみられた。一方、うつ状態群と非うつ状態群による検討では、うつ状態の程度と自己統制感との関係性が確認された。また、リハビリテーションの過程でうつ状態の悪化傾向を示した対象者は人格構造要素において外的統制傾向を示し、特に健康行動における統制感を表す MHLC 尺度においてその傾向が強く、脳血管障害者の心理的要素と人格構造要素との関連性が見られた。うつ傾向の増加と外的統制感の関連は、入院時および退院時における SDS・一般的 LOC 尺度・MHLC 尺度の相関関係からも証明された。

以上の結果から、作業療法士として、脳血管障害者のリハビリテーションを実施していく上で、対象者の心理的状態を考慮し、リハビリテーションの阻害因子のひとつである脳卒中後のうつ状態などの心理的問題に対し、早期に適切な対応を行うことの重要性が示唆された。また、心理的側面と人格構造要素との関係性を適切に評価することで、作業療法における対象者の理解をさらに増し、臨床的実践につなげていくことは、作業療法評価と治療において非常に重要なことであると考えられた。さらなる研究により、臨床に応用可能な評価法や実際の治療手段の開発などへ発展することが期待される。